

特集2 タイ洪水調査報告

本誌編集委員の山崎 文雄氏(千葉大学教授)は、2011年11月5日から7日にかけて、タイ中部にある同国の首都バンコクおよびその周辺地域を訪れ、洪水の状況を調査した。ここでは、その際に撮影した写真を紹介するとともに、被災地の状況を解説する。

ナワナコン工業団地

ナワナコン工業団地は、バンコク中心部から約50km北方、パトゥムタニ県に位置する。1971年に開所し、現在190社が入居しているが、そのうち家電・部品加工メーカーを中心に104社が日系企業である。同団地は、10月17日に北側の運河が決壊して浸水した。筆者らが調査したときは、同団地の一帯は深さ約2mの水に完全に覆われ、全ての工場は1階が完全に水没していた。道路はまさに川のように、電柱や並木によって辛うじて道路と判断できる状況であった。



ナワナコン工業団地内の様子

左端の写真は電話ボックスであり、上部が水面に出ているだけであった。中央の写真は団地入口の商業地区であり、1階の商店は軒先近くまで水没し、道路を通れるのは舟のみであった。右端の写真は下部が水没した銀行ATMである。全ての工場は閉鎖され、警備員が各工場を警備していた。住民は大半が避難していたが、2階より上の部屋で生活している人も一部いた。電気は安全のため遮断されていた。



バンコク市内の地下鉄駅

タイ中部の洪水は11月初旬にはバンコク市内の北部に達した。写真は、11月7日の地下鉄チャットチャック公園駅出口の様子であり、乗客は駅を出るとすぐに水の中を歩く状態であった。地下鉄出口の道路は、歩道で約20cm、車道で約40cm冠水している。地下鉄駅は出入口を高くし、防水扉を設置するなどの対策のほか、駅出入口の数を減らして、浸水地域においても支障なく運行していた。地下鉄駅の右上に見える高架市内鉄道BTSも、正常に運行していた。





バンコク市内の幹線道路

バンコク市内北部にある地下鉄パホンヨーティン駅の周辺道路の冠水の様子。道路は40cm近く冠水しており、通行できる車両は車高の高いトラック、バス、4輪駆動車のみであった。このような幹線道路の状況であるが、庶民の足である市内バスは、本数を減らしながらも運行していた。

高速道路は駐車場

洪水を避けるために、多くの車両が冠水の危険のない高架道路や高架駐車場に避難していた。バンコクとアユタヤを結ぶ高架高速道路は、まさに駐車場の感を呈していた。下の写真に見られるように、軍の装甲車までもが、高速道路の料金所スペースに避難していた。



洪水への備えと下水からの浸水

バンコク中心部にも洪水が迫り、道路の所々や立体交差のアンダーパスで、浸水を食い止めるための土嚢などが設置されていた。また、市内の多くの建物の周囲も、土嚢やブロック遮水壁による防護策が施されていた。しかし、水の流れは、地上の対策だけでは抑えることが難しい。下の写真は、歩道上の地中配管設備の蓋から溢れ出る水の様子である。一緒に調査を行なったタイ人の研究者によると、自宅周囲に浸水防護対策を行なったが、トイレから下水が逆流したほか、配管隙間からも水が浸入し、結局、自宅の浸水を防げず、今は実家に避難しているとのことであった。

